

中野拓哉作 『サラリーマン・グラフィティー 使い捨てカメラ』

<前編>

(効果音) (目覚し時計の音「ジリジリジリーン」)

藤木輝雄の母 (階下から)輝雄、ほーら起きなさい。遅刻するわよ。

弟聡 ふぁー(あくび)。兄貴起きろよ。まったく。今日おれは大学、昼からなんだから、こっちまで起こさないでくれよな！

輝雄 ああ。

聡 あれ、何だ、起きてたの？ どうしたの、今日は？ そう言えばいつもより早いじゃん。

輝雄 ン？ 別に。今日から外回りの営業。

母 (上ってくる)あら、輝雄、起きてたの？ 早くご飯食べなさい。聡もいつまでも寝てないで、一緒に食べちゃって。それに聡は、就職活動しなくていいの？ 早くから始めないと、お兄ちゃんみたいないい会社に入れないわよ。アルバイトばかりしてないで、少しは真剣に考えなさい！

輝雄 おれ、メシいいよ、要らない。じゃあ行ってきます。

輝雄ナレーション おれは藤木輝雄。大学を出て企業に就職して2年目。家は母親と弟の3人暮らし。おやじは2年前、突然倒れて3か月もしないうちに死んでしまった。うちはそれほど裕福ではなかったが、それでも兄弟2人とも、大学生になっていたし、おやじはわずかではあったが保険にも入っていたので、生活には困らなかった。でも、おれは早く独立したかったし、親にも迷惑をかけたくなかったの、とにかかく給料のよい会社に就職したのだ。その上、最近会社で志願して事業部を転属になり、だれも行きたがらない営業に回ったのだ。少しでも目に見える業績を上げて、給料を増やしたかったから。うちの会社は電気通信機器の代理店で、社長も若く、今もっとも成長している産業の一つだ。

木村課長 えー、みんなに紹介しておく。今日からこの営業部第2課に転属された藤木君だ。仲良く…と言いたいところだが、ま、1人ライバルが増えたと思ってくれ。藤木は南マネージャーのところだ。頑張れよ。

南 藤木、早速今日から外回りをしてもらうが、うちは顧客周りはほとんどなく、全くの飛び込みセールスだから、そのまま実力主義で行くからな。力のないやつは要らない。覚悟しておけ。それとお、これがマニュアルだからよく読んでおくように。

輝雄 はい！ よろしくお願ひします。

ナレーション こうして、おれの営業マンとしての毎日が始まった。初めのころは、まだなれていないということで大目に見られていたが、もともと対人関係をつくるのが

苦手なおれにとって、営業の仕事は非常に苦痛で、数週間たっても一向に成績も上がらず、周りの同僚からもどんどん差をつけられていった。

南 まだ半分も行ってねえじゃねえか。やる気あんのかよお！ お前と同じく転属されてきた岡部はな、ノルマなんかとっくにこなしてるんだぞ。もっと気合い入れてやれ！

輝雄 はい。

南 ほーら、ボサツとしてねえで、さっさと外回り行ってこい！

輝雄 はい。

ナレーション それでもやはり、もう一つ押しの足りないおれは、他人の倍動き回っても急に成績がよくなるわけでもなかった。早く独り立ちして、自分の手で自分の人生を切り開いていけるなんて簡単に考えていたおれには、ガツンとパンチを食らった思いだった。期待している母親に、そのことは言えず、家にいても心が休まらなかった。

輝雄 ただいま。

母 お帰り。あら、もう10時？ 今日遅かったわね。会社、大変なの？ ご飯暖めれば食べられるわよ。

輝雄 ああ、夕飯は外で食べてきた。会社も順調だよ。営業成績もいいし。じゃ、お休み。

母 それと、さっきも電話あったわよ。松本さんて人から。松本って、あの高校の時の松本君かしら。まさかね。

輝雄 あ、そう。分かった。こっちからかけてみる。

ナレーション だが、その“まさか”だった。松本篤。高校時代の親友だが、大学が別だったこともあって、この数年会ってなかった。

松本篤 (フィルター音) もしもし。

輝雄 もしもし、あの篤さん…。

篤 (フィルター音) 輝… 輝か？ おれおれ、久しぶりだな。どうしてる？ 元気か？

輝雄 ああ。ほんと久しぶり。どうしたんだ？ 思い立ったように電話くれるなんて。

篤 (フィルター音) ああ、何だかお前の声を聞きたくなってさ。

輝雄 そっか。で、お前、今何してんの？

篤 (フィルター音) おれ、実は病院で働いているんだ。

輝雄 び、病院って、お前、まさか医者…？

篤 (フィルター音) おいおい、勘違いすんなよ。事務員だよ。商事会社に就職したんだけど、間もなく、ある事件があって、そこをやめてブラブラしてた。そしたら、今の病院で事務の募集があって、“事務屋っておれに務まるかな”って思ったけど、応募したら受かっちゃったんだよ。でもやってみたら、それほど退屈でも

ないし、それにうちの病院、キリスト教の教会とくっ付いていて、職員のほとんどがクリスチャンなんだ。実はおれも、そのクリスチャンになっちゃって、今、毎週教会に行ってるんだけど、結構いいよ。それに職場の人間関係とかもすごくいいし、だから続いているのかもしれないな。

輝雄　へえー、そうなんだ。お前のことだから、てっきりバリバリの営業マンかと思ったよ。ま、逆を行くってのもお前らしいけどな。それにしても、教会とはね、ふーん。

篤　(フィルター音)お前は、あん時就職した会社はどうなの？

輝雄　ああ、今営業。給料もいいし、営業成績だってトップクラスだし、休む暇もないくらいなんだぜ。(笑う)

篤　(フィルター音)へえー、お前が営業ねえ。だけど、いろいろ苦労もあんじゃないのか？

輝雄　ああ、まあな。そう言えばさっき、「商事会社である事件があって」って言ってたけど、何があったんだよ？

篤　(フィルター音)うん。それはいずれ。一度会わないか？　また電話するよ。今、キャッチホンが入ってるから。じゃな。

輝雄　ああ、じゃ。

ナレーション　久しぶりの篤からの電話はうれしかった。一瞬、学生時代のあのころに戻ったような気がしたが、すぐおれは、現実の自分に引き戻された。

輝雄モノローグ　篤、どこか変わったな。ファイトはあったが、いつも不平不満だらけだったのに。なんか今、楽しそうだし。でも今のおれはどうだ？　おれは…。

ナレーション　次の日――。

木村課長　おい、藤木。それから南マネージャーもちょっと来てくれ。

ナレーション　おれとマネージャーは、木村課長に、だれもない会議室に呼ばれた。

課長　お前たちのところは、最近成績が全然だが、どうなってるんだ？

南　はい、すみません。来週こそは必ず…。

課長　それから、藤木は特にダメだな。もう慣れていないという時期でもあるまいし。藤木は自分から志願してこの営業に来たんだから、もっと気合いを入れて頑張ってもらわないと。うちの事業部としても、このままだと、いてもらっても困る状況にもなりかねないからな。とにかく、売って売って売りまくれ。いいな、藤木。

輝雄　はい。

ナレーション　もともと自意識が人一倍あり、自信もあって転属を希望しただけに、自分の成績は知ってはいたものの、やはりつらかった。だが、もう後へは引けない。それからというもの、おれは目の色を変えてマニュアル片手に走り回った。営業先から会社に戻るのは午後 10 時を過ぎ、それから会社で山積みになった書類の整理をするのが日課となった。家に帰る終電に間に合わず、会社で

夜明けを迎えるのもまれではなかった。人間、死んだ気でやると道は開ける。やがて商品はウソのように売れ出した。それから1か月ぐらいたったある日、おれは木村課長に呼ばれた。

課長 いやあ、藤木。今週もダントツのトップ。うちも君がいるから持っているようなもんだよ。部長からもお褒めの言葉を頂いてて、わたしも鼻が高いよ。この分で行くと今年中にマネージャーも夢じゃないぞ。(高笑い)

輝雄モノローグ よーし、おれにもチャンスが回ってきたぞ。やってやる、やってやるぞ！

ナレーション その日から、更に輪をかけて人の何倍も働いた。そして数日後――。

聡 兄貴、今日は会社行かなくてもいいの？ ねえ。…兄貴、どうしたの？ 大丈夫？ 兄貴、顔色が。母さん、兄貴が。

輝雄 大丈夫だ。母さんには心配させたくないし、会社も休むわけにはいかないんだ。何でもない。ちょっと胃の調子が悪いだけだ。…うう(ゴボゴボ吐血する。)

聡 あ、血が…。母さん、母さん！ 兄貴が、兄貴が！

母 輝雄、しっかりしなさい。輝雄、輝雄！

(効果音) (救急車のサイレン)

ナレーション 救急車のサイレンの音と母さんと弟の音が、かすかに頭の片隅で聞こえていた。薄れゆく意識の中で、おれは叫んでいた。

輝雄 会社に行かなくちゃ。会社に… 会社に！

<後編>

輝雄 うう… ああー… あれ？ ここは…。

母 あ、輝雄。起きた？ ここは病院よ。今朝あなたが急に倒れて、救急車で運ばれてきたのよ。

輝雄 ああ、そう言えば…。あ、会社！ 何時だよ。わっ、午後3時！ 会社に行かなくちゃ。

母 ダメよ、動いちゃ。絶対安静だって主治医の先生がおっしゃってたわ。

輝雄 もう大丈夫だよ。別に何でもないんだから。自分の体は自分が一番よく知っているって言うだろ。だからもう…。

母 何言ってるの。あなた血を吐いたのよ。

(効果音) (病室のノック音)

三上医師 ああ、初めまして。担当医の三上です。目が覚めましたか、藤木さん。気分はどうです？

輝雄 はあ、大丈夫みたいです。まだ少し胃の辺りが痛みますけど。

三上 ああ、そうでしょう。痛み止めがもうすぐ切れるころだから。

輝雄 あの、先生。それでおれは一体…。いや、これからでも会社に行こうかと。

三上 とんでもない。これから会社だ何て、藤木さん。安静にしてなくちゃ。明日精密

検査をしますが、恐らく急性の胃かいようでしょう。検査の結果にも寄りますが、少なくとも1、2週間は入院が必要です。

輝雄 1、2週間だなんて、先生、そんな！ 今、会社で一番大切なときなんです。それなのに入院なんて…。

(効果音) (再びノック音)

松本篤 失礼いたします。三上先生、お電話が入ってますけど。あれ、もしかして…輝？ 輝じゃんかよ！ お前、何でここに？

輝雄 あ、篤。お前こそなんで？

篤 何でって…。

三上 松本君の知り合いの方でしたか。わたしはちょっと失礼しますよ。お大事に。

(効果音) (ドアの閉まる音)

輝雄 久しぶりだな、篤。お前が働いてるって言ってたの、ここだったのか。こんなところで会えるとはな。

篤 ビックリしたよ、全く。今朝、一人、藤木って人が運び込まれたって聞いてたけど、まさかお前だったとはなあ。でもここはいいぞ。看護婦さんも先生方もほとんどクリスチャンだから、優しいし、居心地抜群だ。まあゆっくりしていけよつうのもヘンだけど。(笑う)じゃ、おれまだ工作中だから。あとでまた寄るよ。お大事に。

輝雄 あ、ああ。

ナレーション 高校時代からの親友との再会は驚きだった。電話をもらった時から、どこか変わったと思っていたが、今、会ってみて分かった。あのころのごつい面影はあるものの、やつはまぶしいくらい明るくなっていた。何て言うか、人を包み込む明るさだ。おれは思わず鏡の中の自分の顔をのぞき込み、ギョツとした。ほおがこけて、目の周りにクマができて、青白い。それに、引きつったような目をしている。これが本当におれの顔なのか？

次の日、午前中精密検査があったが、結果は後日出るそう。会社には母親が連絡してくれていたが、自分では何の連絡も入れていなかったおれは、午後一で会社に電話した。

輝雄 もしもし、藤木ですが、木村課長お願いします。

課長 (フィルター音) ああ、おれだ。どうだ、具合は？

輝雄 お陰さまで、痛みは取れましたが、1週間は入院だと言われまして。ですが、検査も終わったし、何とかすぐにでも退院して会社にも戻りますんで。

課長 (フィルター音) いや、無理せんでいい。お母さんから話を聞いて、お前の代わりを今日、ほかの部から回してもらったから。こっちに來れるようになったらまた連絡くれ。

輝雄 課長。代わりが入ったって、どういう…。

課長 今、ちょっと立て込んでから。とにかく、直ったらまた連絡しろ。いいな。
(効果音) (電話の切れる音)
輝雄 もしもし、もしも…。
ナレーション ショックだった。おれの身を思ってああ言ったのかもしれないが、とてもそうは思えなかった。ついこの前までは、おれのことを高く買っていると言っていたあの課長が、もうおれの代わりを手配している。成績を落とさないことが、課長には最重要事なんだろうか。おれは一体何だ？ 写真を撮りまくってご用済みになった“使い捨てカメラ”か？ 直ったら、おれはどこへ行くんだ？(多重エコー)

篤 おう、輝。どうした、ポーっとしちやって。
輝雄 いや、別に。
篤 じゃあ、今、暇なんだ。ちょうどよかった。おれ、これから午後のチャペルに行こうと思って。
輝雄 チャペルって… 教会か？
篤 ああ。ミニ教会かな。クリスチャンの人や、キリスト教に興味のある人のために、日曜と水曜の昼休み、30分ほど礼拝の時を持つてるんだ。今日はお前の主治医の三上先生の説教だ。いいお話だぞ。
ナレーション キリスト教にはほとんど縁がなかったが、なぜかその時、三上先生の話聞いてみたかったおれは、篤が導くままについていった。
(効果音) (讃美歌「慈しみ深き」をBGMに)
ナレーション チャペルの礼拝が始まった。おれは、篤が渡してくれた歌集を見ながら、生まれて初めて讃美歌を歌った。なぜか、懐かしい響きだった。
三上牧師 では、今日の聖書の箇所をお読みしましょう。新約聖書ペテロの第1の手紙、5章7節です。「あなたがたの思い煩いを、一切神にゆだねなさい。髪があなたがたのことを心配してくださるからです。」どうですか、皆さん。今のあなたには心配でたまらないことはありませんか？ きつとありますね。マズ病気のこと。そして、残してきた仕事のこと。ご家族のこと…。(FO)

ナレーション (説教の途中からダブって)おれはハツとした。三上先生はおれに話してるのかと思って、思わず顔を上げて先生のほうを見た。すると、なお驚いたことに、先生は本当におれのほうを見ていた。
三上 (FI)辞書で“思い煩う”を引くと、“いろいろ考えて苦しみ悩む”とあります。考え出すと、次から次と、別の心配事が浮かんできますでしょう？ 狭いベッドの上で、どんなに悩み苦しんでも、解決の道はないように思える。つらいですよ。だれか、その悩みをそっくり引き受けてくれる人がいたら、どんなにいいでしょうか…。(FO)

ナレーション その時、おれの頭の中には、あの木村課長の言葉が響いていた。

課長 (エコー)お前の代わりに、今日ほかの部から回してもらったから。

ナレーション 三上先生は、イエス・キリストのことを話していた。神の子キリストが、人の思い煩いや悩みを全部身代わりに引き受けてくれたという話だった。キリスト教の教祖であり、西暦の元祖である世界史のキリストは知っていた。だが、それまでのおれには、全く関係のない存在だったその人が、今、おれの心の中にスッと入ってきたような気がした。

輝雄モノローグ イエス・キリスト。この人が、おれのことを心配してくれる…。だけど、そんなこと…。

ナレーション 3日後、検査の結果が出た。かなり進んだ胃かいようだった。今にも穴が開きそうな大きなかいようが1つあるので、それを手術で取り、あとは何とか薬で治るということだった。手術は10日後と決まった。

篤 やあ、輝。どうだ？

輝雄 ああ、篤か。うん、もう観念したよ。お前のくれた聖書をずーっと読んでんだけど、何か、今までのおれの生き方が、かなりいびつだったってことが見えてきたよ。それと、あん時の三上先生の話が、やっぱ頭から離れない。イエスって人が、おれのために身代わりになってくれたって…。

篤 ああ。おれもこの病院に来て、そのことを信じたんだ。この間電話で、前の会社の事件のこと話したろ。おれの部のエリート部長が、仕事に行き詰まって、オフィスの窓から投身自殺したんだよ。“おれも、業績第一で突っ走ったら、こうなるのか”ってものすごいショックだった。いろいろそれから迷ったけど、イエス・キリストを信じて、本当に気持ちが楽になった。輝、大丈夫だよ。丸ごとイエス様に任せりゃいいんだ。祈ってるよ、三上先生と一緒に。

輝雄モノローグ イエス様に、任せるか…。

ナレーション おれはそうつぶやいて、目を閉じた。いつしかおれは、十字架のキリストの夢を見ていた。

<完>